

一列王記 19章・16b、19-21、ガラテア5章1、13-18、ルカ9章・51-62—

一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

—ルカ 9章—

愛の人「自由人」

「人生の二大不幸」それは、①強制されて生きること、②自分本位に生きることだと言います。

私たち被造物は、すべて、神（創造主）のみ心にある「目的」を持って創造され、その目的に向かうために「自由」が与えられていると聖書は教えます。

この自由とは、自分本位に生きる自由ではなくて、神のみ心を生きること、すなわち、『人を大切にして、永遠の命を得る者とされ、神に栄光を帰す』ことなのです。

人が『神のみ心』を知るようになるために、神は預言者を世に遣わします。それは、人間の欲望が目指す誤った道を正すためですが、予言者は、世の権力者や彼におもねる「偽預言者」たちからは妨害者と見なされて、迫害され抹殺されるのが歴史に見る常です。しかし真の預言者は「荒れ野に叫ぶ声」と徹して殉教も

厭いません。神から派遣される者は、人間のあらゆる恐れを凌駕する勇氣と平安を得るからです。

イエスにとって宗教とは、「人は神の子であって、自由な心で神の意図された美しい人となるよう教えるもの」でした。これは、法令規則で定められたからと言って出来るものではないのです。時に宗教の指導者たちが陥る畏は、人々を管理しようとし、その結果、宗教を一連の規則にすり替えてしま

うことのようにです。イエスが使徒たちを任命されたのは、世で言う支配者としてではなく、模範を示して、民全体を慰め、助けを与えて指導し、人々を神のもとに導くことでした。

真の宗教は、心からくるものです。それは、神と深い関係を持つことによって、人々に平安と喜びと愛をもたらし、礼拝は、それが自由になされるときのみ、意味があるものであり、

礼拝を守らなければ罪を犯すことになるという、恐れや罰が与えられるといった脅しのもとに強制された礼拝によって、また、愛を動機としない規則の遵守によって、神が栄光をお受けになることはないのです。神は、ご自身を真に愛する自由な表現のみを喜ばれるからです

神のみ心とは、律法を守る事それ自体にあるのではなく、『愛の人』になることです。

律法全体はパウロが言うように「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。

過去がどうであれ、私たちは今、イエスを愛して生きるなら、人々に自由と開放をもたらしイエスに派遣された使徒とされるのです。

2022年 6月26日

主任司祭 昌川信雄

